

一 次の文章は、小川洋子『ひよこトラック』の一節です。初老の男が暮らす下宿には未亡人の大家とその孫である少女が暮らしていました。言葉を発しないこの少女とどう接していくか迷っていた男でしたが、ある日、偶然二人で「ひよこを満載したトラック」を見て以来、心を通わせ始めました。以下の文章はそれに続く場面です。よく読んで後の問いに答えなさい。

セミの次に少女が持ってきたのは、ヤゴの抜け殻だった。次がカタツムリの殻、ミノムシの糞、蟹の甲羅、と続いていった。圧巻はシマヘビの抜け殻で、直径二センチ、全長は五十センチもあり、それ一つで窓辺のスペースの半分近くを独占した。日に日に窓辺の抜け殻コレクションは充実していった。

少女はそれらを眺め、満足そうな表情を見せた。二人は時折一緒に、窓辺の時間を過ごすようになった。少女はコレクションの前にペタンと座り込み、男はその折々で、**A** 手持ち無沙汰に立っていることもあれば、彼女のためにジュースを注いでやることもあった。

最初のうち男は、こんなにも年の離れた、しかも喋らない人間と、どう間を持たせたらいいのか戸惑ったが、すぐに要領をつかんだ。つまり、**①**。それで二人には何の不足もなかった。

どの抜け殻にも、眺めれば眺めるほど、新しい発見があった。男がまず驚いたのは、脱皮した殻が実に精巧な作りをしていることだった。セミの腹に刻まれた皺から、頭部の先端に密集する毛まで。ヤゴの透明な眼球から、羽に浮き出す網目模様まで。かつて殻の中に生きていた生物の形を、克明に留めていた。隅々まで神経が行き届いていた。どうせ脱ぎ捨てられるものだから、といういい加減なところが微塵もなかった。

更には、それほど精巧でありながら、綻びがないのだった。背中に一箇所、ファスナーのような切れ目がある以外、どこも破れたりクシャクシャになったりしていない。シマヘビになると、そっくりそのまま裏返しになっていて、模様が内側に広がっているという手の込みようだった。

人間でもこんなに上手に洋服を脱ぐことは不可能だ、と男は思った。間違いなくこれは、プレゼントに値する驚異だ、と一人で確信を深めたりもした。

しかし男はこうした思いのあれこれを、少女に向かって言葉にはしなかった。返事がもらえないからではなく、お互い喋らないでいる方が平等だ、という気がしたからだ。たとえ喋らなくても、少女のそばにいれば、彼女が抜け殻について自分と同じような発見をしていることが、伝わってきた。

彼女はそれらを人差し指でつついたり、光にかざしたり、においをかいだりした。ちよつと考え込んだり、口元に微笑を浮かべたりした。少女が動いたたび、肩先で三つ編みの結び目も揺れた。全部眺め終わった後は、順番と向きを間違えないよう、男が並べていた通りに元に戻した。

男は抜け殻と同じように、少女についても次々と発見をした。小ささは手に留まらず、身体中のあらゆる部分に及んでいた。鼻も耳も背中も、ただ小さいというだけで、神様が特別丹精を込めた感じがした。髪の毛は甘い香りがした。瞳の黒色はあまりにも深く、それが何かを見るためのものだということを、忘れそうなほどだった。自分も六つの時は、こんなふうだったのだろうかと思うだけで、訳もなく哀しくなった。

「どいにいるんだい。さあ、ご飯の支度、できたよ」

台所で未亡人が、少女を呼んでいた。

ひよこトラックが二度目に農道を通った時、少女はちょうど男の部屋にいた。ガタガタとしたエンジン音の響きだけで、二人はすぐに何が近づいてきているのか分かった。男は窓を開けた。同じような荷台は色とりどりのひよこで埋まっていた。例のさえずりも聞こえてきた。少女は顔を輝かせ、精一杯爪先立ちをした。吊りスカートが持ち上がって、パンツが見えるのではないかと、男は気がではなかつた。しかし少女はそんなことにはお構いなく、少しでもひよこに近づこうとして窓枠から身を乗り出した。彼女が落ちないよう、男はスカートの紐を引っ張った。

ひよこよね。ああ、そうだ、ひよこだ。二回めともなれば、目配せの確認も簡潔に済んだ。少女は手すりを握り締め、瞬きをするのも惜しいといった様子だった。風景の中で、そのトラックの荷台だけが別格だった。光を浴びる羽毛は樂園であり、湧き上がるさえずりは歓喜のコーラスだった。

けれど男は知っていた。着色されたひよこたちは、長生きできないということ。緑日の人込みの中、ハロゲンライトに照らされながら、彼らは窮屈な箱に押し込められる。乱暴に首をつかまれ、足を引張られる。買われた先ではすぐに飽きられ、羽の色もいつしかあせ、糞まみれになって衰弱死する。あるいは猫に食べられる。売れ残ったひよこは、箱の片隅で、窒息死している。

少女が何も喋らない子供でよかったと、その時男は初めて思った。もし少女に、「ひよこたちはどこへ行くの？」

と尋ねられたら、自分はきつと答えに詰まるだろう。本当のことを言うべきか嘘をつくべきか分からず、うろたえてしまおうだろう。

しかし二人は言葉を発しないのだから、少女の黒い瞳の中では、ひよこはどこへでも行けるのだ。**③** 虹を渡った先にある樂園で、可愛い色の羽をパタパタさせながら、いつまでも幸福に暮らすのだ。

新しいコレクションとして少女が選んだのは卵だった。彼女が裁縫箱と卵を持って二階へ上がったとき、どういふつもりなのか意図がつかめなかった。最初は卵を孵してひよこにしたいのかと思った。少女は裁縫箱から針を一本取り出し、それで卵をつつく真似をした。

はあ、卵に針で穴を開けて、中身を吸い出したんだな。なるほど。卵の殻も立派な抜け殻だ。早速男は作業に取り掛かった。これまでのコレクションは全部、少女が一人どこからか見つけてきたものだった。しかし今回は二人の共同作業だ。自分の働きが大事なポイントとなる。セミやヤゴに負けない立派な抜け殻を完成させなければならぬ。だから男は張り切っていた。

できるだけ目立たない穴にするため、細心の注意を払って男は卵のお尻に針を突き刺し、そこに唇をあてがった。少女はベッドの縁に腰掛け、じつと成り行きを見つめていた。正直なところ男は生卵があまり好きではなかつたのだが、期待に満ちた少女の瞳の前に、嫌そうな表情を見せることなどできるわけがなかつた。平気、平気。私に任せておきなさい、という態度を保ち続けた。

やがてぬるぬるとした生臭い粘液が喉に流れ込んできた。唇に触れる殻はひんやりとし、ざらついていた。男は気分が悪くなりそうなのをこらえ、味わう暇を与えない勢いでそれを飲み込み続けた。すばめた唇と殻の隙間から息が漏れ、奇妙な音がした。

「どいにいるんだい。さあ、ご飯の支度、できたよ」

台所で未亡人が、少女を呼んでいた。

だんだんに男は、緑日で死んだひよこを飲み込んでいような気持になってきた。着色され、ぎゅうぎゅう詰めにされ、遠くへ運ばれた挙句、一人ぼっちで死んでいったひよこを、自分は今吊っているのだ。^④ 少女に気づかれないよう、そつと花園に埋葬しているのだ。

男は目を閉じ、最後の一滴まで、すべてを吸い尽くした。少女はベッドの上で足を揺らしながら拍手をした。二人の間に、白い小さな抜け殻が一個、残された。男はそれを窓辺のコレクションに加えた。卵はすぐに他の抜け殻たちと上手く馴染んだ。少女の拍手が一段と大きくなった。

▼男は相変わらずホテルの玄関に立ち続けた。自転車を四十分走らせ、ロッカーで制服に着替え、回転扉の前に立った。タクシーが着くと、お客の手から荷物を受け取り、「本日、ご宿泊でございますか？」と尋ねた。フロントまで案内しているあいだに、もう次の新しい客が到着していた。男は一日中、ただ玄関の内と外を出たり入ったりしているだけだった。誰も男の顔など見なかったし、名前も覚えなかった。ごくたまに、「ありがとう」と声を掛けてくれる客もあったが、そのたびに男は、礼を言われるような何かを自分はしたのだろうか、という気分になった。

同僚のドアマンたちは皆、男よりずっと若かった。男より力強く、ハンサムで、制服がよく似合った。食堂やロッカーで一緒になっても、雑談することはなかった。彼らが男に話し掛けてくるのは、勤務のシフトを交代してほしい時だけだった。▲

新しい下宿に引っ越してから、一つだけ変わったことがあった。子供連れの客が来ると、つい少女と比べてしまうのだ。この子は少女と同じ歳くらいだろうか。いや、熊の縫いぐるみなど抱いているところを見ると、少女より幼稚だ。あのロビーで走り回っている子。あれはいけない。いくら子供でも分別がなさすぎる。少女ならきつと、背筋をのびし、何十分でも、もちろん静かに、ソファアに座っていられるはずだ。こつちの子はどうだろう。身長も目方もほぼ同じくらいだが、顔は全く似ていない。少女の方がずっと可愛らしい……。こんな具合だった。

どうして少女が抜け殻を集めるのか、男は不思議に思わなかった。少女には縫いぐるみよりも抜け殻の方がよく似合っている気がした。抜け殻を求め、果樹園や用水路の水辺を探索している彼女の姿を思い浮かべるとき、男は涙ぐみそうになって、自分でも慌てることがあった。少女はたった一人で辛抱強く、草むらをかき分け、枝を揺すり、泥を掘り返す。白いソックスが汚れ、三つ編みが解けそうになる。ようやく少女は一個の抜け殻を発見する。^⑤ ついさつきまで生き物だったのに、今では空っぽの器になり、見捨てられてしまった抜け殻。中には沈黙が詰まっている。少女はそれを救い出し、大事に掌に包み、男の元へ走って届けるのだ。

三度めの時、少女はもう、ひよこトラックについて相当の知識を蓄えていたので、姿が見えるずっと前にエンジン音をキャッチし、階段を駆け下りていった。男も後を追いかけた。少女は切り株に立ち、いつそれがやって来てもいいように、体勢を整えていた。

少女は間違えていなかった。一本道のずっと向こうから、トラックはやって来た。ほらね。やっぱりね。

少女は得意げな顔をして見せた。

罫罫罫罫

うん、本当だ。

男はうなずいた。

太陽を背に、トラックの荷台は、四隅までわずかの隙間もなくひよこたちの鮮やかな羽に埋め尽くされていた。たとえあと一羽でも、余分に乗せることは無理だろうと思われた。

男の目には、いつもよりトラックのスピードが遅く、ふらついているように映った。荷台が揺れるたび、さえずりは更にトーンを上げ、波のようにうねりながら空の高いところまで響き渡っていった。少女は切り株の上でジャンプしていた。

私たちにひよこを十分に見せてやろうとして、わざとゆっくり走っているのだろうか。そう、男が思った時、トラックは二人の前を通り過ぎ、農道を外れ、草むらに入り込み、そのままプラタナスの木にぶつかって横転した。あっ、と声を出す暇もない間の出来事だった。

男は慌ててトラックに駆け寄った。運転手は自力で外へ這い出してきた。額から血が出ていたが意識ははっきりしていた。

「大丈夫か。しっかりしろよ。大家さん、大家さん。すぐに救急車を呼んで」

男は大声で家の中の未亡人に呼びかけた。それから運転手の首に巻かれていたタオルで傷口を押さえ、もう片方の手で身体をさすった。

ふと、男が視線を上げると、そこはひよこたちで一杯だった。視界のすべてをひよこが埋め尽くしていた。突然荷台から放り出された彼らは、興奮し、混乱し、やけを起こしていた。ある群れは意味もなくその場で渦巻きを作り、ある群れは空に逃げようというのか、未熟な羽をばたつかせ、またある群れは身体を寄せ合い、打ち震えていた。

その風景の中に、少女がいた。

「駄目よ。そつちへ行つては。車が来たらはねられてしまう。そう、皆、この木陰に集まって。怖がらなくてもいいのよ。大丈夫。すぐに助けが来るわ。何の心配もいらぬの」

少女は彼らを誘導し、元気づけ、恐怖に立ち竦んでいるひよこを、胸に抱いて温めた。色とりどりの羽が舞い上がり、少女を包んでいた。

これが彼女からの本当のプレゼントだと、その時男は分かった。

^⑦ 自分だけに与えられたかけがえのない贈り物だ、と。

男は何度も繰り返して少女の声を耳によみがえらせた。それはひよこたちのさえずりにかき消されることなく、いつまでも男の胸の中に響いていた。

(小川洋子『ひよこトラック』による)

^⑥

これこそが、

問一 ——線部ア「手持ち無沙汰」、イ「分別」の意味の説明としてもっとも適切なものを次の1～4の中からそれぞれ選び、その番号で答えなさい。

- ア 1 何もすることがなく、時間をもてあますこと。
 2 じっとしながら、忙しく思考をめぐらせていること。
 3 間が持たず、いら立ちを隠せないでいること。
 4 緊張感がなく、気持ちに締めりが無くなること。
- イ 1 世間をよく知っており、人情に通じていること。
 2 周囲の状況に流されず、自由にふるまえること。
 3 道理をよくわきまえて、物事を慎重に考慮すること。
 4 相手の立場に立って、注意深く考えて行動すること。

問二 ① に入れるのにもっとも適切な言葉を次の1～4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 少女の関心をつかめばいいのだ
 2 抜け殻を眺めていればいいのだ
 3 相手が喋るのを待てばいいのだ
 4 何かが起こるのを信じればいいのだ

問三 ——線部②「自分と同じような発見」とありますが、男は少女とどのような発見を共有していると考えていますか。四十字以上五十字以内で説明しなさい(句読点、記号も一字に数えます)。

問四 ——線部③「虹を渡った先にある楽園で、可愛い色の羽をパタパタさせながら、いつまでも幸福に暮らすのだ」とありますが、これはどういうことですか。もっとも適切なものを次の1～4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 少女はトラックの荷台のひよこの姿を想像しながら、自分にも幸せな未来が訪れると信じているということ。
 2 少女は心に傷を負っており、唯一現実を忘れさせてくれる愛らしいひよこの姿だけが、心のより所だったということ。
 3 少女はひよこの悲惨な最期について知らないで、想像の中で幸せな未来を思い描くことができるということ。
 4 少女はひよこの行く末について話したくなかったので、想像の中だけでも幸せな未来を思い描きたいのだということ。

問五 ——線部④「少女に気づかれないよう、そっと花園に埋葬しているのだ」とありますが、男がそのような思いになったのはなぜですか。もっとも適切なものを次の1～4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 ひよこの埋葬のような厳しい仕事は大人がやるべきであり、幼い少女にやらせるのはむごいと思っていたから。
 2 卵の中身を吸い出して抜け殻を作る行為の無意味さを、まだ人生のはかなさを知らない少女に知らせたくなかったから。
 3 生卵は好きではないが、初めての二人の共同作業に大きく期待をしている少女を失望させたくないと考えていたから。
 4 ひよこが長生きできない悲惨な存在だと、顔を輝かせて夢中になっている少女に悟らせたくないと思っていたから。

問六 ▼ ▲ではさまれた部分の描写から、男について述べた説明としてもっとも適切なものを次の1～4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 自分らしさを発見できず、いら立ちを隠せない。
 2 表面的にしか感謝されない仕事に不満がある。
 3 同僚たちと仲良くしたいのに上手に話せない。
 4 孤独であり、自分の人生に疑問を持っている。

問七 ——線部⑤「ついさっきまで生き物だったのに、今では空っぽの器になり、見捨てられてしまった抜け殻」とありますが、男はこれに何を重ねて見えていますか。適切なものを次の1～5の中からすべて選び、その番号で答えなさい。

- 1 未亡人
 2 男
 3 少女
 4 トラック
 5 同僚のドアマン

問八

⑥

に入れるのにもっとも適切な言葉を次の1〜4の中から一つ選び、その番号で答えな

さい。

- 1 生きているものへの慈しみ
- 2 ひよこに向けられた無償の愛
- 3 少女が聞かせてくれた声
- 4 私に対する少女の思い

問九

線部⑦「自分だけに与えられたかけがえない贈り物だ」とありますが、そう感じたのはなぜですか。もっとも適切なものを次の1〜4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 目立たないよう、慎重に生きてきた男にとって、運命にもあそばされるひよこを聖女のように守り抜く少女の姿は、あまりにも神々しくて、深く心を打たれたから。
- 2 心に深い傷を負い、声を失っていた少女があきらめずに努力することで声を取り戻す姿を見て、自分もあきらめず頑張って生きていこうという意欲をもらったから。
- 3 ひよこを守るため必死になって少女が振り絞った声は、男の耳にしか届かない幻だったが、かえってそのことが彼の彼女を守る使命感を増すことになったから。
- 4 物にしか興味を示さず、話すことができない少女がひよこを守るために初めて声を発した場面を、少女とともに過ごしてきた自分が目撃できたことに感動したから。

読解問題

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「記号」ということばで、私たちはふつうどのようなものを連想するであろうか。一方通行や進入禁止を表わす交通標識、プラスやマイナスを表わす数学の記号、学校とか山とかの所在を示す地図の標識——人によって差はあれ、こういったものが平均的なところであろう。もし受験生であったら、「解答は所定の欄に記号で記入せよ」といったような使い方を思い浮かべるかも知れない。選択肢として挙げられている(イ)とか(ロ)、あるいは(a)とか(b)——それが「記号」である。

このような例に代表される「記号」のイメージは、どう見てもあまり良いものではない。つまるところ、「記号」は何かの代用をしているにすぎないという意識があるからである。本来の意味で重要なものはその何かの方であって、「記号」はその何かをまともに持ち出す代わりに、それと一対一に対応させられたものが便宜上使われているだけ、というわけである。(試験で「論述」式の方が「記号」式よりも十分な評価ができるという発想も、こういうことと無関係ではない。)

現代の記号論で「記号」と言う場合は、実はこの種の記号とはほとんど関係ない。この種の記号は、多分「記号」と言うよりは、むしろ(あるいは「記号」の中でも)「符号」とでも呼んだ方が良いでしょう。つまり、すでに正確に規定された内容が了承されていて、ただそれをそのまま持ち出す代わりに、もっと扱いやすくそれと一対一に対応すると了承されているものが使われているというだけのことである。いわば、本当は何かがあるという目印として、同じ場所に便宜上置かれているおぼろげな感じが、これらも良いであろう。例えば、「文化を記号として捉える」というようなことを言うことができるが、これはもちろん、文化の諸相をこのような意味での(つまり、「符号」と呼んだ方が良いでしょう)「記号」でもって転写してみようというようなことではない。

現代の記号論で「記号」ということが考えられる場合は、いささか逆説的に聞こえるかも知れないが、ア、この種の「符号」と呼ぶのがふさわしいと思われる「記号」を超えていくような営みに、何よりもまず第一に関心が寄せられるのである。そのような営みの一つの例を考えてみよう。

「なぜ詩を作るのか」という問いに対して、ある詩人は「日常のことばの記号性を打破するために」と答えている。日常のことばでは、語形と語義の間に、慣習によって定められた結びつきが出来上がってしまっている。日常のことばを使っている限り、われわれはすでに多く惰性化した日常のことばの決まりの上に成り立つ日常の世界の中で、これまた惰性化した営みを繰り返すだけである。詩人の意図しているのは、この惰性に揺さぶりをかけるといふことである。既成の語形と語義の結びつきをずらしてみる。(例えば、②「②」のような比喩はその一つの場合である。)そして、その新鮮な

ことば遣いの創り出す意味を、日常の世界を超えるための踏み台とするわけである。

新しいことば遣いも、ある表現があることを意味している(あるいは、意味しているように解せる)という限りは、やはり「記号」であることには変わりない。イ、それは、すでに定まった内容を慣習に従って何かが表わしているというような「符号」ではない。むしろ、新しい「記号」が生み出され、その「記号」によって捉えられた新しい内容がわれわれの世界に新たな知見として加えられる。そ

注1 便宜上とりあえず。

注2 惰性化したと当たり前になってしまうた。

注3 既成のすすでに出来上がっている。

これは一つの創造的な営み——神学的な意味とは別の意味での「言語創造」の営みである。

「言語創造」と言うとは何か大変崇高なことに聞こえるが、実はこのような「言語創造」は、人間であれば誰しもが絶えず行なっていることである。朝の小鳥のさえずりに楽しい一日の予告を読みとったり、一枚の葉の落ちていく様子に天下の秋を知ったりする時、そこでは「記号」が作り出されている。人間は、すでに慣習的に定められた「記号」をあやつるばかりでなく、新しい「記号」をせっせと創り出しているのである。

現代の記号論がとりわけ関心を寄せる「記号」とは、実はむしろこのような「記号」なのである。こういう「記号」には、慣習としてすでに出来上がっている「符号」のような固定性はない。それらはいわばもつとしなやかなものであって、「記号」ということばの適用にためらいすら感じさせる。

現代の記号論での議論では、「記号」ということばの代わりに「記号現象」(あるいは、「記号過程」といった用語がよく使われるが、これもそのような点を顧慮してのことなのである。このように考える場合、いちばん基本になることは人間の「意味づけ」とでもいった行為——ウ、あるものにある意味を付したり、あるものからある意味を読みとったりする行為——である。人間が「意味あり」と認めるもの、それはすべて「記号」になるわけであり、そこには「記号現象」が生じている。この「言語創造」にも似た行為を、人間は絶えず、しかもその文化のあらゆる面で行なっている。その原型と本質を探ってみること——そこに現代の記号論は関心を向けるのである。人間の「意味づけ」する営みの仕組みと意義——その営みが人間の文化をいかに生み出し、維持し、そして組み変えていくか——現代の記号論はこういうことに関心を持っていると言いかえてもよいであろう。

エ、人間の「意味づけ」の営み——それは日常生活のレベルでは、何よりもまず「ことば」の使用によって支えられている。もしそのようには考え難いというのであれば、それはすでに慣習として固定化したレベルでことばを捉えているからである。遡って、ことばが生まれる時点を考えてみるとよい。いちばん身近で単純な例は、日常生活における「命名」という行為である。

例えば自分が飼っている犬に「ボチ」という名前をつけるとする。なぜ名前をつけるか——もちろん他の犬と区別するためである。では、どうして区別するのか——それはその犬が自分にとって他の犬とは違った特別の価値を持っているという認識があるからである。(人間に対する命名を考えてみれば、この点もつと明らかであろう。人間には誰しも名前が与えられるが、犬はそうではない——これはもちろん大変理由のあることなのである。) 特別の名前が与えられることによって、そのものが他でもって代えることのできないものであるという意味づけが完了し、自分との関連が確認されるわけである。名前が与えられ、確認される対象は、例えば自分の親しい人とか、大切に飼っている犬とか、その正体も素性もよく分かっているものに限られる必要はない。例えば、あるグループの人たちが自分たちの行動・運命が何か自分たち以外のものによって支配されているかと思ひ、そのようなものに「プーボー」と名前をつけたとしよう。(このような場合、名前をつけることをはばかって単に「印」——例えば④——でもって代えることもあろうし、あるいは名前はあつたがそれを言うのはタブーになっているということもある。しかし、いずれにせよ、それを表わす「記号」が出来たわけである。)そして

人びとは自分たちが「プーボー」という名前をつけた対象に働きかけて(例えば、折りや供え物を捧げることによって)、自分たちの行動や運命に対する支配が好ましいものになるよう試みるであろう。しかし、「プーボー」そのものの正体はその間、結局はよく分からないままかも知れない。

ただ、名前を与えることによって人びとは一つの存在を想定し、自分との関連でそれを位置づけてみようとしていることだけは確かである。「プーボー」という記号は、未知のものを捉え、自分との関連で意味づけし、自分たちの世界に取り込もうとする人間の試みの産物である。少し考えてみれば、未知のものを意味づけるという記号の働きは、このような「宗教的シンボル」とか、捉え難い芸術的理想を象徴するといったような場合から、未知の素粒子や惑星を想定して理論的に論じてみるというような自然科学の先端的な分野に至るまで、人間の文化的な営みに広く関わっていることが分かるはずである。

ことば(あるいは、一般に記号)による意味づけという営みを通じて、人間は自らにとって未知のもの、関わりがなかったものを自らとの関連で捉え、自らの文化の世界の中に組み込み、自らの世界をふくらませ続ける。

人間の記号による営みには、このように「創造的」と呼んでよい一面があると同時に、実はもう一つの重要な面があるということにも注意しておかなくてはならない。

再び、ことばを例にして考えてみよう。幼児が⑦ことばを習得する過程というのは、何も知らなかった自分のまわりの世界を整理し、秩序づけていく過程でもある。例えば、「ママ」ということばが「マンマ」と分化する時、母親は(自分に食べ物を与えてくれる(そして、その他にも自分にいるいろいろなことをしてくれる)人)として、(食べる物)とは、区別されるべき対象であるという把握が出来上がる。外国語の習得される場合も同じである。英語の話し手が日本語を学べば、同じ(兄弟)(brother)であっても、年上の者(「アニ」と年下の者(「オトウト」)が言語習慣的に異なるものとして意味づけられていることを知る。

幼児も外国人も、このようにして自らの世界をだんだんとふくらませていく。そして、このような過程を通じて一つの言語の習得が完了した段階では、習得者は一つの意味づけの体系を身につけたことになる。

この過程が基本的には、すでに述べたような記号を通じての「創造的」な営みであることには疑いはない。幼児にとってはまったく未知の新しい世界を、外国人にとっては自らのものとは異質の新しい世界を、それぞれ築き上げる営みである。ただ、この場合、幼児も外国人も完全に自由に、自己の主體的な捉え方において新しい世界を創り出す立場には置かれていない。彼らの身につけるのは、習得することばの決まり(「コード」)によって支えられた既存の世界の秩序である。

「ママ」ということばを自分の母親と同年輩ぐらいの女性に区別なく適用する幼児は、周囲の人たちから注意されてそのような捉え方の許されなことを知る。日本語を身につけようとする外国人にとっては、「アニ」と「オトウト」を区別することを拒む自由はない。一つの言語を習得することは、一つの特定の捉え方——一つの「イデオロギー」——を身につけることでもあるのである。

注4 崇高なことと恐れ、かしこまるほど気高く、尊いこと。

注5 顧慮しての、考えての。

注6 bother(ブラザー。英語で「兄弟」を意味する。兄にも弟にも使う。

注7 既存の、すでに存在している。

ひとたび身につけた意味づけの体系——それが慣習として確立すると、それは逆にそれを身につけた人を捕えて放さない「牢獄」にもなる。それを捉えた人間を、今度はそれがとりこにするのである。捕えられた人間は、その意味づけの体系の決まりに従って、ものを捉え、行動する。人間は機械のように動き、すべてが「自動化」する。何かが起こっているようで、実は何も起こっていない——そういう世界が生じてくる。

しかし、機械とは違って、人間は——一方では秩序を導入しなければ気がすまない存在であると同じように——完全に秩序づけられた閉じた世界に長くは安住してられない存在でもある。遅かれ早かれ、創造への営みに人間は駆りたてられる。そして、既成の秩序を部分的になり、全体的になり、組み変えることを試みるようになる。すでに見た通り、詩人は何よりもこのことばの牢獄に挑む人たちである。そこでは日常のことばを超える言語創造を通じて、新しい価値の世界が開かれるわけである。言語習得の場合と較べると、もう一段階高い次元での意味づけの営みがなされるのである。

人間は、自分のまわりの事物に対して意味づけをしないではいられない存在である。しかもその際の意味づけは、すべて人間である自らの関連で行なわれる。自然的な対象であっても、それが人間との関連でどのような価値を有しているかという視点から捉え直され、人間の世界のものとして組み入れられる。その世界は、すぐれた意味での文化の世界である。そして、そのような世界の創造、維持、それから時間的・空間的いずれもの意味における伝達——こういったすべての文化的な営みに、人間が記号をあやつるといふ営みが深く関わっている。人間は確かに「記号を使う動物」なのである。

記号が人間の文化的な営みに深く関わっている——こういう認識が現代の記号論、とりわけ「文化記号論」と呼ばれるものを強く特徴づけている。ところで、そのような考え方がどこから生まれてきたかと言えば、それはわれわれが日常何の気なしに使っている「ことば」というものについての新しい認識であると言ふことができよう。

本書の中でも、記号の営みを説明するために、すでにことばの例をいくつも利用してきた。ことばは、人間の生活のすみずみにまで行きわたっている記号である。誰もが知っているし、また知っていないが、はならない記号である。ところが、身近な親しい対象によくありがちなように、改めてそれを見直し、考え直してみるということは意外に少ない。幼児の記憶を探ってみたり、初めて知らないことばに接した時の新鮮な驚きを思い返してみれば、われわれが日常ことばというものをあまりにも当り前のものとして受け取っているということに気づくであろう。実は、ことばというものはわれわれが日常考えているような当然のものではなくて、それ以上の何かであるという認識——そういうことばについての新しい認識が現代の記号論の発想の背後にあると言ふことができよう。

(池上嘉彦『記号論への招待』による)

問題

問一 ア エ に当てはまるものを、次の1～4の中からそれぞれ選び、その番号で答えなさい。なお、同じ番号を二度以上使うことはできません。

- 1 しかし
- 2 ところ
- 3 むしろ
- 4 つまり

問二 ——線部①「試験で『論述』式の方が『記号』式よりも十分な評価ができる」という発想も、こういうことと無関係ではない」とありますが、これはどういうことですか。その説明としてもっとも適切なものを次の1～4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 一対一の対応が決まっている記号式の問題よりも、無限の対応関係が考えられる論述式の問題の方が、実力の測定に適していると考えられているということ。
- 2 記号式の問題は本質を理解していても答えることができるが、論述式の問題はそういったごまかしがきかないので、理解度を測りやすいと考えられているということ。
- 3 記号式の問題は選択肢の数によって難易度が左右されるが、論述式の問題はそのような曖昧さがないため、学力の測定に適すると考えられているということ。
- 4 代替物にしかすぎない記号で答える問題よりも、大切な何かそのものを答える論述式の問題の方が、受験者の能力を測るのに適すると考えられているということ。

問三 ② に入れるのもっとも適切な言葉を次の1～4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 子どものように幼い
- 2 炎のつらら
- 3 まるで悪魔のようだ
- 4 ウドの大木

問四 — 線部③「『言語創造』の営み」とありますが、ここでいう「『言語創造』の営み」とはどのようなものですか。その説明としてもっとも適切なものを次の1〜4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 日常の世界を超えた新しいことは遣いを発見することによって、ことばの決まりそのものを破壊していかうとする行為。
- 2 日常の中で固定化してしまったことばの決まりに挑戦することによって、新しい世界の見方を獲得する行為。
- 3 慣習化したことば遣いに揺さぶりをかけることで、ことばにはそれぞれに決まった意味があるのだと再確認する行為。
- 4 惰性化したことば遣いを乗り越えることで、ことばが記号現象であることを改めて確かめようとする行為。

問五 — 線部④「人間には誰しも名前が与えられるが、犬はそうではない——これはもちろん大変理由のあることなのである」とありますが、「人間には誰しも名前が与えられる」理由を二十五字以上三十五字以内で説明しなさい（句読点、記号も一字に数えます）。

問六 — 線部⑤「ブーポー」の説明として適切でないものを次の1〜4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 「ブーポー」はその名を知らない者にも影響を与える。
- 2 「ブーポー」は人間の意識が創り出した存在であるといえる。
- 3 「ブーポー」は記号であり実体は存在しない。
- 4 「ブーポー」は数字の「1」や「2」と同じものであるといえる。

問七 — 線部⑥「もう一つの重要な面」とありますが、その内容としてもっとも適切なものを次の1〜4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 記号が人に新しい世界を提示するという面。
- 2 記号が既存の世界の秩序を表すという面。
- 3 記号が人を捕えて放さない牢獄にもなるという面。
- 4 記号が閉じた世界への安住を許さないという面。

問八 — 線部⑦「ことばを習得する」とありますが、言語の習得について述べた次の説明文の「オ」・「カ」に入れるのに適切な部分を、オは九字、カは十字で本文から探し、抜き出して答えなさい（句読点、記号も一字に数えます）。

ことばを覚えることによって人はあるものとあるものが「オ」であることを学び、そのような行為を通して自分のまわりの世界を整理し、秩序づけていく。すなわち、一つの言語を習得するということは「カ」を身につけるということになる。

問九 — 線部⑧「人間は確かに『記号を使う動物』なのである」とありますが、これはどういうことですか。その説明としてもっとも適切なものを次の1〜4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 人間は記号によって他者とコミュニケーションをとらずにはいられず、絶えず他者との関わりを求める生き物であるということ。
- 2 人間は記号によりまわりのものを意味づけることで、自然の世界と文化の世界を分けて認識しているということ。
- 3 人間はあらゆる物事を記号を通してとらえ、その記号で構築した意味の世界の中で生きているということ。
- 4 人間は他の動物と違い記号を発明したことにより、言語による他者との意思疎通を可能にしたということ。

三

次の——線部①～⑧のカタカナの部分漢字で、⑨・⑩の漢字の部分ひらがなで書きなさい。
 いずれも一画一画をていねいに書くこと。

教会のボクシ。①

彼はドクゼツ家だ。②

組織をトウソツする。③

ダンチヨウの思いであきらめる。④

バイオリンのコウエンを聴きにいく。⑤

ブユウに秀でる。⑥

インガ応報は世の常だ。⑦

計画をネる。⑧

温泉地に湯治に行く。⑨

丸薬を飲む。⑩

■■■■■■■■■■

(以下余白)

